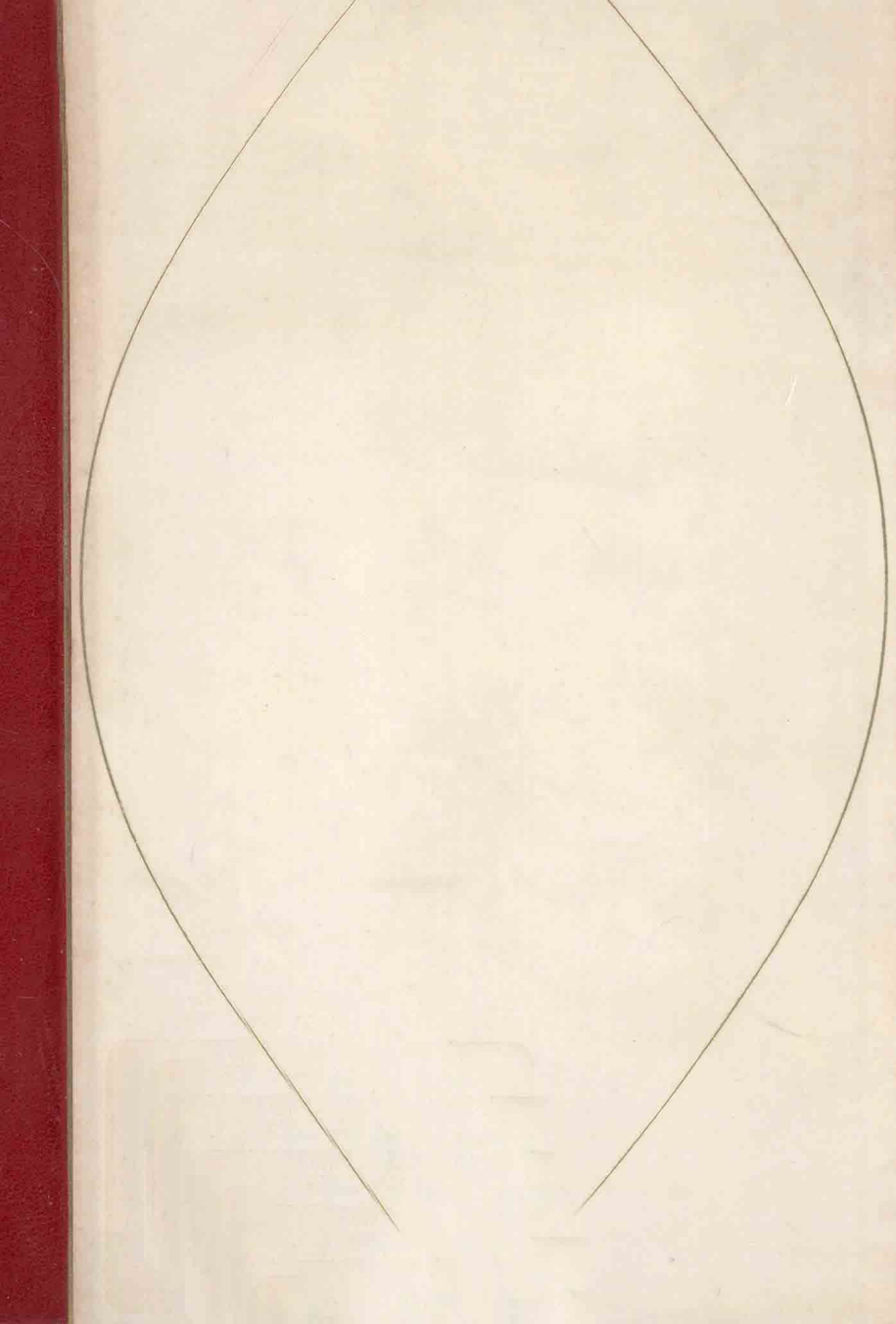
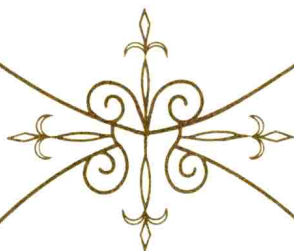




三島由紀夫全集



12

小 説

XII

監修／石川淳 川端康成 中村光夫 武田泰淳
編纂／佐伯彰一 ドナルド・キーン 村松剛 田中美代子

新 潮 社

三島由紀夫全集第十二卷

昭和四十九年二月二十日印刷

昭和四十九年二月二十五日発行

著者 三島由紀夫

発行者 佐藤亮一

装幀者 杉山寧

三島由紀夫



発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一

電話 東京(〇三)二六〇一・一一一 振替 東京八〇八

定価 二五〇〇円

第十回配本(全35巻・補巻1) 落丁本・乱丁本はお取替いたします

Copyright © 1974 YÔKO HIRAOKA Tokyo Japan

三島由紀夫全集 第十二卷 目次

永すぎた春		七
足の星座		二一
色好みの宮		三七
影		六三
お嬢さん		六七
愛の疾走		五一
解題		七七
校訂		七九

三島由紀夫全集 第十二卷 小説 (12)

永
す
ぎ
た
春

January

1

百子は、あんまり愛しすぎてゐる、とよく思ふことがあつた。一念を貫ぬきとほしたからここまで來たのだが、ここまで來たからと云つてそれで安心して、感情を節約するといふことが、できるものではなかつた。

郁雄のやさしさが、少しでも減つて來る兆候がみえたわけではない。しかし郁雄は、あきらかに安心してゐた。百子より安心して、その愛し方には切迫したはげしさのかはりに、大らかな強いものが加はつた。これは當然の、また好ましい變化である筈なのだが、百子には一概にさう言ひきれぬものがあつた。

二人は一月十五日の成人の日に、たうとう婚約したのである。

ここまで漕ぎつけるのは、實に並大抵のことではなかつた。映畫なら、そこまでの波瀾萬丈で一時間半を費して、二人の婚約でハッピー・エンドになるところである。

二人は去年の春に知り合つた。

郁雄はT大法學部のまじめな學生で、學校へはちゃんちやん出てゐた。學校のかへりにも、あつちこつちへ引つかかつて歸宅がおそくなるといふタイプの學生ではなかつた。世間では、青年の墮落が嘆かれ、若い兇惡犯の續出が怖れられてゐるといふのに、郁雄はこんな風潮を、どこ吹く風かといふ顔をしてゐた。いつたい墮落などは、墮落の才能のある人間でなくてはできない相談で、自分にはそんな才能はないものとあきらめてゐた。

しかし寶部郁雄は、コチコチの、融通のきかぬ法科學生でもなかつた。ダンスもできたし、麻雀も、スケートも、人のやるものならひととほり出來た。意志が鞏固だから溺れないといふのではなく、何となくのんびりしたところがあつて、溺れないですんだのである。

だから春のある日のこと、友人に、學校の門前の古本屋の娘が美人だときいて、のぞきに行くだけの若者らしさは、ちゃんと持つてゐた。

雪重堂書店といふその風流な店名は、先代（つまり百子の祖父）が、白樂天の

已訝衾枕冷

復見窗戶明

夜深知雪重

時聞折竹聲

（すでに訝る衾枕の冷やかなるを。また見る窗戶の明らかなるを。夜深くして雪の重きを知る。時に聞く折竹の聲）

といふ五言絶句「夜雪」からとつたもので、これだけでも、木田百子の家の古めかしさが、想像されようといふものである。

焼け残つた大學の前には、これも焼け残つた古い書店が軒を並べてゐた。戦前のけしきをそのまま、戦争末期の空襲の最中も、悠然と店をあけ、戦後の混乱時代も、平然と古本を賣つてゐた。雪重堂は、大學の法學部、經濟學部、文學部などの研究室を、古いおとくいにしてゐて、代々の部長とも、主人は友だち附合をする仲であつた。學者尊敬癖も雪重堂代々の病ひで、そろばんを度外視して、いつまでも勘定を待つた。實際はそんなものでもないのだが、百子の祖父も父も、學者ほど心のきれいな、神様のやうな人種はない、と思ひ込んでゐたのである。

さて、百子は女學校を出ると、みづから進んで店番に出るやうになつた。それが去年の春である。

百子は古い言葉で言へば、才色兼備で、頭のあまりよくない兄に比して、店で扱つてゐる本の名を、いつでもすつかりソラで言へた。たとへば客が、

「川口さんの『日本法制史』の下巻はありますか？」
ときく。

「はあ、法學叢書の版ならございますけど」

「もつと新らしい版がいいんですけど」

「菊波書店の改訂版でございますね。あれなら一週間以内に、取り寄せられると思ひますけど」
ざつとこんな調子である。

本郷界限にはいろいろと新らしい喫茶店も店びらきをし、學生をよびあつめるために、垢ぬけ

のした女の子を置いてゐる店もあつたが、郁雄の友だちは、氣品といひ、美しさといひ、何が何でも、雪重堂の娘の右に出る者はない、と言ふのであつた。

郁雄は半信半疑だつた。古本屋ときいただけで、埃にうづもれた、かびくさい、うすぐらい店の奥に、ムジナみたいなおやぢが、眼鏡を鼻の上へずらして、不景氣にむつとり坐り込んでゐる姿が目にかぶ。そこへ一人の少女を置いて想像してみても、何となく顔いろのわるい、トゲトゲした、半分肺を犯されたやうな娘の像しかうかんで來ない。

「まあだまされたと思つて行つてみるよ。わるかつたら、ひやかしただけで、出て來ちやへば、損もしないぢやないか。よかつたら……」

「よかつたら？」

「……さうだな。本を買ふより、賣りに行つたはうが、話ができるな。君、なんか賣りたい本はないか？」

「俺、本を賣つたつてことがないんだ」

「仕様がなのお坊ちゃんだな」

學生同士は、こんな會話を交はしながら、正門へ出る道のいちやう並木のあひだを歩いてゐた。春の新學期のはじめだつたから、いちやうは青々と芽ぶいてゐた。安田講堂から正門へむかふそのひろい舗道は、今朝がたの雨に、ところどころちひさな水たまりを残してゐた。しかしそれに映つてゐるのも、今は晴れた空の、やはらかな春の雲であつた。

午後の講義がをはる。空はまだまだ明るい。春である。制服を着け、ややすりきれた書類鞆を下げ、カツカツと靴音を立てて、正門を出るときの心持。……それで二十一歳だつたら、そのの

こりの一日に、何かを期待して胸をときめかせない筈はない。それに、上野の花はもうおしまひだから、大學の裏門から池ノ端へ出て、お花見をしようなどといふ酔狂な氣持も起きない。

郁雄もだんだん友の言葉に期待する氣持になつてゐた。

雪重堂の店先は、午後になるとすでに暗かつた。店の奥には、あかりをともした。

友がずんずん奥へ入つてゆくのに、郁雄は氣はづかしく、店先に積まれてゐる三十圓均一の駄本なんかを、ていねいに見てゐた。

「草花栽培の秘訣」

「社交ダンス讀本」

「心靈術の科學」……等々。

そのとき、店の奥から、若い女の聲と友の聲とがかはるがはるきこえた。友は自分の賣る本を高く賣りつけようとし、女の聲は澁つてゐるのである。

「それはムリですわ」

「ムリなことはいですよ。せめて二百圓にして下さいよ」

「だつて、ほかのお店へ行つてごらんになればわかりますわ。百五十圓の正札がついてゐましてよ」

「ここなら二百五十圓に賣れますよ」

「ほんたうに無理難題ね」

郁雄は聲にさそはれて、奥へ行つた。

水あさぎの上つばりを着た少女が、しかめつ面をして坐つてゐた。髪は兩肩にふさふさと垂れ

てゐた。目が大きくて、うるんで見えたが、決して涙でうるんでゐるのではなかつた。

「どうしても二百圓！」

「どうしても九十圓！」

友だちと彼女と斷乎として言ひ合つたが、おもしろさうに成行を見てゐる郁雄の目に合ふと、少女はふつと吹き出した。友だちもこらへかねて吹き出した。

「ぢや九十圓でいいや」

と友はあつさり本を投げ出した。少女はまだ郁雄のはうを見ながら、

「あなたたち、グルなのね」

と言つた。郁雄はびつくりして赤くなつた。

——これが二人の初對面であつた。

2

婚約にはたつた一つ條件がついてゐた。

郁雄の父が、郁雄の卒業まで式は擧げさせないつもりだ、と主張したのである。そこで婚約期間、今年の一月から來年の三月まで、一年三ヶ月の永きにわたることになつた。百子は今すぐにも結婚したい氣持だつたが、郁雄は婚約まで漕ぎつけたあとは、二人が信じ合つてゐる以上、もう結婚したのも同じだといふのであつた。

婚約成立の晩、郁雄の兩親の實部夫妻は、百子の兩親の木田夫妻を、許婚者ともども、銀座の